

第一幕

登場人物 光

光、舞台上に、忽然とあらわれ、文字通り、光速で舞台に万遍なく立つ。
ちらばったものたちを見渡して、嘆くような、飽き飽きしたような響きで独りこちる。

「毎日毎日、なんでこんな——」

光、一段とまばゆくなる。

「おおい、だれか……」

猫、現れて、去る。光、それきり黙る。

登場人物 受像機

受像機、映像を垂れ流す。誰へとはともなく、呼ぶ。

「ねえ」

反応して、声が返ってくる。もしくは返ってこない。いずれにせよ続ける。

「寝言ってさあ、誰が言ってるんだ？」

間。

「寝言にさあ、返事すると死ぬっていうじゃんか。死ぬって。死んでると思われて、連れ去られるらしいよ。怖すぎ。寝言怖すぎ……でもそれはさ、オカルトとしてさ、あの寝言に返事するとするじゃん、それって、寝てる側も聞こえてるんだって。音として。まあ目は閉じてても耳はさ、寝てる時閉じたりするわけじゃないじゃんか。みみぶたとかないし。まぶたみたいな。だから、寝てる人にもその返事は聞こえてる、って言われても、はあそうですわね、って思うだろうけど、そういう次元じゃなくて、寝言を言ってる口と、その返事を聞いている耳って、もうさあ……」

猫、近づいてくる。受像機、それを追い払う仕草。

「ちよつと、ちよつと、ちよつと、ちよつと、あの子、静電気あるから……しっ、しっ」

猫、受像機のうしろへ回って、温いところへ体をすりよせ、うづくまる。

「まいったな、またか……」

間。

「——その、寝言をしゃべって、返事を聞いているやつってさ、誰なんだろうって思うわけよ。その、本体？ ……のほうは寝てるわけで、じゃあその寝言はどこから来てるんだっていう話——あ、でも——ううん——（画面がゆれる）——そうだな、いや、その寝言をしゃべって、返事を聞いているやつってさ、たぶん、そいつなんだろうな。なあ、たぶんそいつら全員……寝言言うやつって全員、狸寝入りなんだよ……寝てるふりっていうか——狸になってさ——いや、起きてるふり——狸起き——じゃなくて、夢遊病——で、夢遊病のやつがこう、寝言まで喋ったら——うむ——ああ——（言葉は不明瞭になっていく）」

しばらくの間。彼の寝言はおさまり、小さくいびきが舞台に響きはじめる。それは十秒ほどかけてだんだんと大きくなり、また十秒ほどかけてだんだんと小さくなり、そしてついに聞こえなくなる。

登場人物 口

口、浮かんでいる。

「遅刻してませんか？ わたし、（息切れ）——遅刻——してませんよね？ ぴったり、ぴったりに着いたと思うんですけど、——（息切れ）——あれ？ あれ？ ん……（息切れ）——（怪訝に）——あ、わたしの時計、ずれてるっぼいんです……」

猫が横切る。

「いや、わたし、もう着いてたつてことになるんですよ……なんかきもちわるいですよね、時計を直すのつて……こう、この時間どこ行っちゃうんだろう？ とか、あれもう一回この時間？ つて、いや、ただずれてただけつて言えば、それはそうなんですけど、こう……損したとか得したじゃなくて、傷のあるCDを再生するとき、一瞬飛んじやったり巻き戻ったりするみたいなの、あの感じつてつか、わたし結構気持ち悪くて」

猫、ジャンプして口に跳びかかるが、失敗する。口には目や腕はないので、あきらめて放つておく。

「わつちよつと……危ないな……しつしつ……つてつか知つてます？ クリスマスイヴつてあるじゃないですか。イヴとかいいながら、朝から今日はイヴだねーとか言つたりして、まあそれはどうでもいいんですけど、わたし独り身だから、さみしいですよ。こう独り身だと、クリスマスイヴとかどうでもよくて、クリスマス撲滅とか、言うじゃないですか。遊びで……遊び……で、そう、つい最近知つたんですけど……自転と同じ方向に、飛行機で飛んでいつて、また戻つてくると、一日スキップできるらしいんですよ。えーと、だから、二十三日の夜に、発つじゃないですか。それで、ぐるーつて回つて戻つてくると、もう二十五日。面白くないですか。——いや実際にはやりませんけど……（自嘲ぎみに笑う）」

間。

「だから、絶対つながつてないはずなの、この、ずれが、シームレスにつながるつてつか……完全に途切れてるわけでもなくて、だからつてスムーズなわけでもなくて——でもその中間、みたいのでもなくて、こう、つながつているけどつながつてないから、つながつてるつてつか……水面の屈折みたいなのですかね。昔テレビで見たんですけど、電話を通してデュエットするつて不可能みたいですよ」

口、なんだか口ずさむが、しかし合わさる声はなく、開いた笑いのまま黙り込む。

第四幕

登場人物 水槽

水槽、どこからか聞こえた言葉に反応して、つぶやく。

「水面？」

応えるものはない。

「空耳か？」

登場人物 扇風機 扇風機

扇風機が二台、向かい合っている。一方は首を振りながら風を送り、もう他方はその風を受けて回っている。唐突に口を開く。

「あかさあ」

「あかさ」

「オウム返しするなよ」

「オウム返ししてるんじゃないよ」

紙幅上、以下、片方だけを記す。

「おもちゃじゃねえんだよ、俺たちはさあ……遊びじゃないから……なんでオウム返ししてムカつくんだろうな……だからやめろって、いや……おもちゃはこう、ハムスターとかがこう喋ったのを録音して喋るやつはかわいいんだけどさあ……あと、まだ言葉覚えてたの赤ん坊が、こう真似してるのとかはかわいいよ、実際……あとやまびことかはいいじゃん、でもなんだろうなあオウム返しするやつがむかつくのってさあ——なあなんだろうな。……お前に言ってるんだけど……全部やってることは同じなんだけどさあ……同じじゃないか……こう、そうだな、これは理解の問題なんだよ……こっちの言うことを、相手が理解してるって思うと、なんかむかつくんだよ……俺の言ってる言葉の、意味がなんか、適当に捨てられたみたいで……カタカナみたいな感じ……ハイワカッテイマスみたいな、いや絶対わかってないだろ、プログラムだろみたいな……あれって、そうだよ、俺の言ってることを理解してるかどうかじゃなくて、そのロボットみたいなやつが、自分の言ってる意味をはなから理解してない感じ……」

「擬音みたいなものでしょ」

「いや、急に対応するなよ」

「いきなり会話を始めるなよ」

間。風の音だけが、一定のリズムで聞こえる。それは物理的な規則にもとづいている。

「でも、聞こえてるのは確実なんだよな」

「でも、たしかに聞こえてはいるんだよなあ」

嫌気がさしたのか、唐突にやりとりは終わる。

登場人物　ねずみ

ねずみ、猫に追われている。舞台上を縦横無尽に駆け回るので、猫はいつこうに捕えることができない。
ねずみ、しゃべり出す。

「あいつ、何考えてやがるんだ、ああ、なんなんだよ、全然わかんねえよ」

ねずみ、壁穴の家の中をのぞいて、駆け込む。

そして別の穴から出てくると、どこからか猫の鳴き声がして、反射的に——生理的に——縮み上がる。

「わっ!……なんなんだ、あいつ……どこにいる?」

ねずみ、いい加減疲れているが、駆け回るのを止めるわけにはいかない。

「どこにいった……ちくしょう……もう何時間逃げているか……うん、もうしばらく……ずっとしばらく、逃げて
いる……はじめから……いや、まあ、ともかく今、俺は、逃げています。逃げなきゃいけないから、逃げる……そう
だ、いつそ……そうだ、アニメで、アニメで見たことがある、俺が、ずっとあいつの、背中に隠れて、いれば、あ
いつは、永遠に俺に追いつくことは、ないさ……」

ねずみは穴を上へ下へ行き来して、猫の背中を探し始める。

しばらく舞台上を駆けまわるが、一向に見つからない。

「どこに行ったんだか……俺、見つかったら、食われちゃうのか?　どんなふうになんて言われて?」

ねずみ、左右を見回しながら、梁から壁へ、穴から床へにげまわる。

「俺の、(転ぶ)……(立ち上がる)……俺の後ろにいたりするんじゃないか?　ずっと……いや、おつかねえ……
右か?……いないか……いる?……待て、待て……いや、待つな、待つな……俺が待つのは、いや、(息切れ)……
ともかく、まだ何も、起こっちゃいないさ」

ねずみ、振り返ることはない。

「これだけ、どこにもいないとすると……、そうだな、見落している、のかもしれないけど、いや、……もしかし
たら俺が、食っちゃったか、いや……」

ねずみ、とりあえず、逃げるのをやめない。

第七幕

登場人物 往復葉書

往復葉書は貼り付けられている。

「いつもご欠席で残念に存じます」

まだ投函されていない。

標識、舞台に微動だにせず立っている。そもそも何も言うことはない。

「知らなくていいですけど……こう、みなさんも、見ようによっては、死んでるみたいなものですよ。死んでるっていうか、もう、鮫……鮫、いるんですよ？　ここに……ちよつと、ほら、鮫……みなさん、死んでますよ。もはや、気をつけてくださいよ。気をつけて……ねえ……死んだふりって、鮫には通じないんですよ……熊とか猫には通じるかもしれないけど、ね、鮫って、ロレンチーニ器官つてのがあるんですよ。ロレンチーニ。そこつて、弱い電気を感ずることができて、それで獲物が生きているかどうか、わかるんですよ。物理的に。熊とか猫とかは、こう、見て判断するから、眼で判断するから、ごまかせるかもしれないですけど、鮫はごまかせないですよ。ロレンチーニ器官があるから、電気信号でわかっちゃうんですよ。ほんとう、気を付けたほうがいいです。ほら！あそこ！鮫！……なんて、鮫がいるかもしれないじゃないですか。呼んだら出てくるかもしれないじゃないですか、鮫。鮫、話とか通じなさそうですしね。獯猛で。まあ、ここに鮫がいるかどうかは、本当は知らないですけど、いうる……いうんですよ。鮫は……鮫はどこにでもいうるし、電気信号で、こう、生きてるかすぐわかるから、あんまり鮫の気を引いたりしないほうがいいです。注意をひかないように……鮫って本当、耳とかいいんです。目はうっすらとしか見えないんですけど、耳が良くて。耳と電気。耳と電気の世界……海の中だけですけど、世界見てる……見てるって言うの、おかしいかもしれないんですけど、耳と電気の世界見てるんです。全然想像つきませんね、わたしみたいな標識にとつては……いや、本当」

標識、ずっとぺちやくちやくと喋りつづける。いつのまにか黙っている。

登場人物 戯曲

戯曲、壁に貼られている。

「俺はさ、作り話ってわけじゃあないんだよ。——そう、記録というか……予定というか……、(しばらくの間) 調書、そう、調書だ。——俺は、供述調書なんだ。こう、残しておいた方が、あとでいろいろと便利だからなあ、上の連中にとっては」

近くを猫が通りかかる。

「あの猫？ あの猫の調書はないよ。誰が猫に取り調べするっていうんだよ……返事できやしないよ」

戯曲はそれきりうづくまる。

登場人物 天使

天使たち、集まっている。

「銀なら五枚、銀なら五枚ですから。銀なら五枚です、銀なら五枚！ 銀なら五枚、銀なら五枚！ 金なら一枚ですけど、でも銀なら五枚！ ていうかみなさん、天使……天使の仕事、知ってますか？ こう、俺らの仕事って、なんていうか、こう雑用っていうか…… 会社に、あ、みなさん会社勤めですか？ 商社とか……に、資料室ってあるでしょう。俺たちの仕事って結構そういうのが多くて、いわゆる営業に行くことはほとんどなくて、こう、いろいろと報告書とか、領収書とか、郵便とか、どんどん来るのを、こう蒐集して、整理して……って実際結構ちらかつてるんですけど……まあ、ともかく頑張ってます」

天使、饒舌に続ける。

「——何の会社かって？ そりゃああれですよ、何、フランダーズの犬とか見たことありません？ いわゆる営業っていうのはあれですよ。で、それに関する諸々の書類を、資料室でこう、保管しておくっていうか。保管係ですから。そりゃ背中にも羽的なものはありますけど、天使上ね。天使上。でもまあ飛ぶことなんてそうそうないっていうか。まあ暑い日とか、涼みますけど。——（笑う）——こう、ちょっと油断すると頭がぼーっとしますからね、長いことやっても……まあ頑張ります」

天使、また一瞬ぼうっとしてから、はっと我に返る。

「銀なら五枚、銀なら五枚……」

登場人物 包装紙

ずたずたに切られて、貼られた包装紙。

「ゴダイバ食べたことあります？」

包装紙、表面に光を受けてきらきらと照り返す。

「ゴダイバのマーク見たことあります？ あの、ゴダイヴァ夫人の……あの、裸で馬に乗って街を練り歩いた人。その人らしいんですけど、あの話って、街の人たちは、夫人に敬意を表して、全員、窓を閉めて見ないようにしたっていうじゃないですか。じゃあ、そのゴダイヴァ夫人のこと、誰も見てないんですよ。誰も……誰も目撃してないんです。目撃者がいない——けど、記録だけある、みたいな……ゴダイヴァ夫人からしても、その窓の向こうに、本当に『見ないようにしていた』街の人たちがいたかどうかは、わからないわけで……こう、窓を閉めて……目を閉じて……おたがいシャットアウトされてるっていうか……そういえば、目って閉じられるけど、耳って閉じれませんよね。開けっ放しで……だからそういう逸話って生まれるのかなって思います」

包装紙、上を見上げてから、また向き直る。

「あ、でも実際は、覗いてた奴がいたらしいですけど……トムってやつが」

包装紙、動かない。

第十二幕

登場人物 猫

猫、0345894865へ電話をかける。